

向上が、長期的には生物の物質生産とフラックス観測をリンクさせることが肝要であることが強調された。引き続き、3題の招待講演があり、近藤昭彦氏（千葉大学）から衛星データの解析による蒸発散量と地上フラックス通年観測結果の比較から衛星観測による植物活動モニタリング（サテライトフェノロジー）の有効性と今後の研究課題が紹介された。講演予定の沖大幹氏に替わって、東京大学生産技術研の鼎信次郎氏から陸面水文植生モデルの研究プロジェクトが紹介され、熱帯域におけるエネルギー・水収支計算事例と観測結果を用いたモデル検証事例が話された。招待講演の最後は視点を変えて山形与志樹氏（環境研究所）から今年11月のCOP6を前に目下の焦点となっている京都議定書の吸収源条項に関するIPCC特別報告の検討状況が分かりやすく紹介された。これらに続いて一般講演がなされ、北方落葉広葉樹林における観測からフラックスと光合成特性やLAI（葉面積指数）の関係とその季節変化の解析結果4題が報告され、フラックス長期観測と植物生理学的な調査の結合の重要性が示され

た。さらに、森林総研のフラックス観測ネットの紹介と温帯常緑針葉樹林における観測成果の速報、熱帯植生、モンゴル草地など各種植生でのフラックス観測事例3題が報告された。最後にGAME/Tibetプロジェクトの集中観測の成果を利用した一次元陸面水文過程モデルの計算結果と植生・土壌パラメータの検証事例が報告された。

本専門分科会は80名を越える参加を得て、各サイトでの貴重なフラックス観測成果をAsiaFluxの活動にどのように結合し、各種プロジェクトとモデル構築に活かしてゆける内容は何かという議論のスタートとなった。しかし本番はこれからで、フラックス収支のインバランスの問題、フラックス観測と植物生理学的調査との結合、プロットスケールの観測成果を広域モデルへ如何に組み込むか等、さらに一步踏み込んだ議論を展開しなければとの感想を持った。

山本 晋（資源環境技術総合研究所）、
原蘭芳信（農業環境技術研究所）



平成13年度笹川科学研究助成の募集

1. 対象領域

人文学、社会科学および自然科学（医学を除く）またはそれらの境界領域。申請区分は(1)一般科学研究、(2)学芸員・図書館司書等が行う研究、(3)海洋・船舶科学研究。

2. 研究計画

単年度（平成13年4月1日～平成14年2月10日）内に完了し成果を取りまとめられるもの。

3. 助成額

1研究課題にあたり年間100万円を限度とする。

4. 対象者

平成13年4月1日現在35歳以下で、次の条件を満たす者（大学院生・博物館（含む類似施設）および図書館の学芸員・図書館司書等はこの限りでない）。

(1) 平成13年4月1日現在大学院修士・博士課程ならびに博士（前期・後期）課程に在籍する者と進学予定者

(2) 大学院生と同等以上の能力を有する者

(3) 大学・研究所・研究機関・教育機関等において研究活動に従事する者

(4) 博物館（含む類似施設）および図書館で研究活動に従事する学芸員・図書館司書等の職員

5. 募集期間

平成12年9月1日（金）～10月31日（火）必着

6. 申請先

（財）日本科学協会笹川科学研究助成係

〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-11-2

日本財団第2ビル3階

Tel：03-3502-1931, Fax：03-3580-8157

E-mail：LDG01360@nifty.ne.jp

申請書、応募方法等詳細については気象学会事務局まで

URL：http://www.jss.or.jp